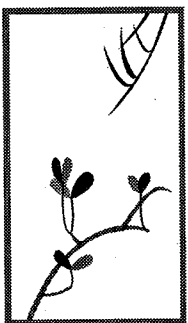


過去との遭遇



森本あんり

その町は、名前もよく読めなかった。Wroclawという綴りからすると「ウロクラウ」と読めるが、ポーランド語のLに見える字はWのような発音で、WはVのような発音だから、「ヴロツワフ」と読むのよ、と娘に教えられても、それがなかなか頭に入らず、旅の行先を尋ねられてしどろもどろになり、つい「ええとポーランドの南の方の町です」と答えるはめになっていた。

この夏その町を訪ねたのは、世界に七つある「ジョンナサン・エドワーズ・セクター」の一つがあったからである。ジョンナサン・エドワーズはアメリカ独立前のピュエリタン神学者で、研究の本部は彼

の手書き草稿などが保管されているイェール大学にあるが、近年ヨーロッパでも少しずつ研究者が増えている。そのため、各地に「グローバル・セクター」が設置されており、先般わたしのいる日本の大学にも、アジア初のセクターを設置するようお誘いがあった。とはいえ、各地のセクターが実際にどんな働きを担うのか、いまひとつよくわからなかったのので、先輩格である二つのセクターを訪ねてみることにしたのである。その一つがヴロツワフにあるのだった。

ウハウなどを教えてもらった後、その大学の学長にもお会いする機会があった。彼は、エドワーズのことにはあまり興味がなさそうだった。そもそも文明開化以前の原野みたいなアメリカに住んでいたピュエリタンに、どうして中央ヨーロッパの人が興味をもつのか、わたしも実のところ不思議だったから、そのことには驚かなかった。その彼が、エドワーズの話もそこそこに、わたしにこう尋ねたのである。

「ところで、ボンヘッファアの記念像をご覧になりましたか？」

「へ？ ボンヘッファアですか？」

デイトリヒ・ボンヘッファアは、ド

イツの神学者で、反ナチ闘争からヒトラー暗殺を企てて捕らえられ、終戦直前に処刑された牧師である。マーティン・ルーサー・キング牧師やオスカル・ロメロ神父と並ぶ現代の殉教者の一人に数えられ、現代神学にも深甚な影響を及ぼしたことは、わたしもよく知っている。でも、そのボンヘッファアがこの町と何の関係があるのだろうか。

実は、この町は第二次大戦前までは「ヴロツワフ」ではなかったし、そもそもポーランドですらなかったのである。戦前は「ブレスラウ(Breslau)」というドイツ領の町だった。そしてそれは、ボンヘッファアが生まれて六歳までを過ごした町なのである。そのことに思い及ばなかったわたしは、まったく間抜けだった。やはりヨーロッパは、戦争の歴史を知らないとい理解できない。

ボンヘッファアの父は精神医学の権威で、後にベルリン大学医学部の教授を務めるが、当時はブレスラウの大学付属病院の院長だった。デイトリヒは、そこ

で八人兄弟の一人として生まれている。町でもそのことは記憶されているらしく、市庁舎には彼の肖像があったし、広場には記念像も建てられていて、像の足元にはその日も誰かが捧げた一輪のバラが置かれていた。わたしは、この現代の殉教者に何だかとても申し訳ない気分になり、一家の住んだ家が今でも近くにあると聞いて、そこを訪ねてみることにした。

ボンヘッファアの伝記にはよく触れられていることだが、一家はそこでとても幸福な時代を過ごしている。父は、ある伝記ではこの家のことをこんな風に記している。「われわれは幸運にも、付属病院に程近い白樺の森に、広大な庭に囲まれた感じのよい広い大きな家を借りることができた。子どもたちはそこで伸び伸びと遊んだ。当時の写真も何枚か掲載されていて、いかにもドイツの上流階級の子弟らしく、広い庭でお行儀よく夏の日差しを楽しむ子どもたちの姿が写っている。その幸福な子ども時代と彼の厳粛

な生涯の終わりが強い対照をなすからだろう、この家のことは伝記のなかでも特別な光彩を放つ一節になっている。

車でわたしを連れて行ってくれたのは、娘婿の親族であった。たまたま地元の人なので、われわれはさほどの困難もなくその家を見つけることができた。見てみると、たしかに壁の一角には、一九九六年に国際ボンヘッファア協会が設置した碑板が見える。そんな歴史の重みをもった現実が突然目の前に現れたことに、わたしは胸が高まるばかりだった。

だが、もちろん前もって訪問の許可を得ていたわけではないので、家の門は閉ざされている。柵越しに遠くから見ると、家の窓は開け放たれており、中に人がいそうなのがわかる。「すみませ〜ん」と大声で呼びかけるが、応答がない。そのうち、隣家の住人が顔を出して、「ここに回れ」と合図してくれた。ポーランド語を介して事情を話すとわかってくれたが、とにかく隣家のことなのでどうすることもできない。

わたしの親族はお気楽な性質なので、「せつかく遠くから来たんだから、もう少し近くに行って写真だけでも撮っていらっしやいよ」と勧める。わたしも、この国じゃそういうものなのかな、とついその気になって、隣家との柵を乗り越えようとしたり。するとたちまち、隣家から「それはいけません」と強い叱責(に違いない)の声がした。こんなところまできて、無断住居侵入で逮捕されたりしてはかなわない。結局われわれは、遠くから家の写真を撮っただけで早々に退散することになった。

その家の住人が在宅だったかどうかは、今もわからない。だが、冷静に考えてみると、これは実に迷惑で失礼千万な話である。現在の住人はボン・ヘッファア家とは無関係のようで、たまたま自分が買った家が過去の有名人の住まいだったというにすぎない。帰国して調べると、ネットには日独英ポといろいろな言語でこの家についての情報が載っていることがわかった。それだけでもずいぶん居心

地の悪いことだろう。なかには、日本の神学者たちが大挙してこの家を取り囲んでいる写真もある。おそらく、事前にきちんと連絡をしてお願ひすれば、今回もきつと異なる応対があり得ただろう。だが、そんな手続きもなしに、いきなりどこかの東洋人観光客がカメラをもってやってきたら、たとえ在宅であったとしても相手をする気にならないのは当然である。たしかに、その人はナチスと闘った英雄だったかもしれない。だが百年後に同じ家に住んでいるというだけで、いつまでもそんな好事家につきあう義理はないのである。もし逆にわたしがその家の住人だったら、きつと今ごろ門の外に「ボン・ヘッファアの昔の家を見たい人お断り」と掲げているだろう。ここで謝っても仕方がないのだけれど、ほんと、お騒がせしてすみませんでした。

実は、エドワーズのおかげでもうひとつ、ヨーロッパのおどろおどろしい過去と出会うことになった。今回の旅行で訪

ねた二つ目のセンターが、ドイツのハイデルベルク大学にある。ハイデルベルクは第二次大戦中も破壊されず、中世以来の美しい町並みが残されている。戦後はアメリカが占領軍司令部を置いたため、アメリカとの関係も深い。当地に「エドワーズ・センター」があるのも、ここがドイツにおけるアメリカ研究の重要な一角を占めているからである。

ハイデルベルク大学は、Zukunft, 60: 1386.と校章にあるとおり一三八六年の創立だが、開学時から何と云っても神学を中心とした構成で、同大学はその後の神学史にも何度か顔を出す。なかでも、宗教改革直後にカルヴァン主義神学の輪郭を形づくることになった「ハイデルベルク信仰問答」は、よく知られている。大学は長いこと町の中心にある聖霊教会ですべての授業を行っていたが、たまたまわたしが訪れたのは、この「ハイデルベルク信仰問答」四五〇年記念の行事中で、教会堂の中にはそれを論じたスイスの神学者カール・バルトの大きな

肖像が掲げられていた。

わたしのなかのハイデルベルク大学は、マックス・ヴェーバーとエルンスト・トレルチという二人の巨匠が実り豊かな共同生活を送ったところである。投宿したのもネッカー河畔のその住所にいちばん近いと思われるホテルを選んだのだが、わたしを迎えた教授はちよつともの寂しげだった。「そんな時代はもう過

ぎ去りました。神学や哲学などの古い質問は旧市街に取り残されたままですが、今やハイデルベルクといえば、北部の郊外に広がった医学や生物学や物理学の大学のことなんです。お金がかからず、お金を生まない学問は、ここでも冷飯食いのようである。

その彼のお奨めで、川の対岸にある山へ登ってみた。観光客がよく行くのはケールカーで登れる古城のある方だが、反対側はいわゆる「哲学者の道」のずっと上であり、「聖人山」(Heiligenberg)と呼ばれている。その名のとおり、この山には多くの聖人が集積している。すでに紀元前五世紀にはケルト人が聖所や墓地を築いており、その後ローマ人がユピテルとメルクリウスに捧げる神殿を建てている。次いでキリスト教徒がやってきて、九世紀に修道院を建てたが、これは一六世紀に廃れて廃墟となった。町の建物には、この修道院で使われた石が切り出されて再利用されたという。いったいここにはどれだけの歴史が積み重ねられ

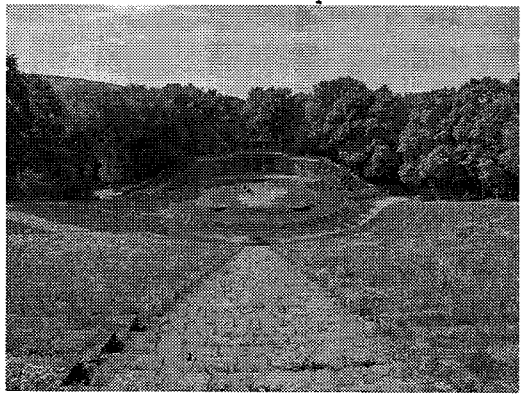
ているのだろう。

極めつきは、その歴史の威信をすべて我が身に引き集めるようにして、ナチスがここにプロバガンダ運動のための巨大な円形劇場を建設したことである。一九三三年にヒトラー政権が成立すると、ゲッベルス宣伝相は「新しいドイツ民族を総統の意志に従って創成することを目的として、ドイツ各地に野外集会場の建設を命じた。ハイデルベルクのそれは三五年に完成し、労働奉仕で駆り出された二万人を前に、ゲッベルス自身が演説したという。今でもその音響は抜群によい。

第三帝国の栄光を過去のローマ帝国に重ね、新しいアリア民族の精神を高揚させようとするこの不気味な建築物は、宗教学的にも興味深い。有史以前から幾重にも積み重ねられてきた宗教施設の本質は、そこが「世界軸」(axis mundi)であることを示している。それらは、他ではなく、どうしてもこの場所に作られなければならないのであつたのである。なぜな



紀元前5世紀頃のケルト人定住地遺跡。



ナチスが山頂に建設した古代ギリシア風の円形劇場。

ら、そこが天と地を結ぶ世界の臍だから。

この概念は、世界の至る所に見られる。たとえばエルサレムがそうである。部外者からすれば、あんな小さな町を世界の三つの宗教が聖地にしたら、紛争になるのも当たり前だ、どこか別のところにすればよいのに、と思う。でも、もちろんそういうわけにはゆかない。あそこ

でなければならぬ、何か特別な理由があるのである。

そして、ここが大事なところだが、それは宗教の如何によらない。それぞれの宗教の教義や世界観を越えた、人間に共通の原初的な感覚によるのである。旧約聖書を読むと、エルサレムは聖書宗教の成立以前からすでに幾重にもカナン人の聖所であったことがわかる。だからダビデもそこに都を建てたのである。

「聖人山」の円形劇場には、わたしの後から小学生くらいの一団ががやがやと登ってきた。ピクニックを楽しむにもよい所だが、先生の話を脇で聞いていると、これはヒトラー時代に第三帝国のナントカが、とかなり本格的な歴史の授業を展開している。すぐ隣にある修道院の廃墟も、一九世紀末に再発見され、戦争を挟む一世紀をかけていねいに修復されたらしい。

さて、自分の国をふり返ってみると、日本の小学生たちは、あんな風に身近な歴史の教育を受けることがあるのだろうか。

か。あの小学生たちの真摯なまなざしを見てみると、「自虐史観」などという言葉は、どうしても浮かんでこない。過去の遭遇は、それを見据えて将来を拓こうとする自覚的な意志を要求するのである。

もしかしたら、ボンヘッファーの生家を覗きに行ったわたしの不埒な行為も、そういう姿勢の一端として許されるかもしれない。いや、これはただの言い訳だけ。

(もりもとあんり・神学宗教学)